舫（もや）い　浜に生きる

16

ドリームキッズのステージに盛り上がる大石町内会の畠山一信会長（左）と、大石小の元校長菊池信一さん（右）＝釜石市唐丹町

大石漁港（釜石）

地域の絆これからも

「あら先生、元気そうで何より」

海の日の18日、釜石市唐丹町の大石漁港を中心とした大石地区。10年前に閉校した旧大石小に、地域住民が続々と集まった。声を掛けられたのは、同校最後の校長を務めた菊池信一さん(63)＝一関市大東町＝だ。

菊池さんは大東中OBでつくる秀麗会の一員として訪問。現在片隅に6戸の仮設住宅が立つ校庭には、引き連れてきた大東町の子ども音楽グループ「ドリームキッズ」の歌声が響いた。約100人が震災を忘れさせるかわいいステージを堪能。手拍子を打ち、笑みの輪を広げた。

大石地区と同会は、菊池さんの校長時代に交流を始めた。漁船で唐丹湾を遊覧し、網起こしを見学。お昼にはホタテやウニなど海の幸を味わった。閉校で地域ぐるみの運動会がなくなった集落にとって、年に1度のかけがえのない行事だった。

同地区は震災で1人も犠牲者を出さなかったが、家屋は10戸が流失・損壊。

同行事も開催が危ぶまれたが、同会は「これまでの絆を大事にしたい」（菊池さん）と、大東産米のおにぎりと豚汁を携え、今年も同校にやってきた。

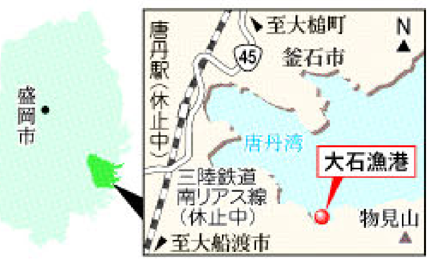
心も体も温めてもらった大石町内会の畠山一信会長(63)は「本当にありがたいし、感激した。大石も時間とともに少しずつ落ち着き、ワカメ養殖の準備もやっている。早く海の仕事をしたい」と前を向く。

菊池さんは「大石は大丈夫だ。ここで2年校長をやったけど、すごいパワーだから」と復興を信じる。

校門の前に、校歌を刻んだ閉校記念碑と音声装置がある。ボタンを押すと最後の児童7人が吹き込んだ校歌が流れる。この日、楽しいうたげのBGMに時を超えた元気な歌声が何度も響いた。

大石漁港　唐丹湾南側に位置し、釜石市で最も南にある漁港。ワカメやホタテの養殖が盛ん。漁港背後の傾斜地に約40世帯100人が居住し、約30世帯が唐丹町漁協組合員。漁船55隻のうち、すぐ使えたのは2隻だけだった。

「舫（もやい）」は、船と船とをつなぎ合わせることや、寄り合って一緒に仕事をすること、集落内の共同作業や利益の共同分配などを表す。沿岸地方では地域のつながりを示す「結（ゆい）」の意味で使われることも多い。



待望グラウンドで汗

大船渡・末崎野球スポ少

各国から支援、整備

児童活動の場に

震災の影響で校庭など屋外運動場が使えなくなった子どもたちのため、大船渡市末崎町の民有地にグラウンドが整備されている。23日は末崎野球スポーツ少年団（谷山誠志監督、団員35人）の児童が汗を流した。地元のロータリークラブを中心に世界中から支援があった。スポ少を中心とした地域のつながりが、未来を担う子どもたちの活動の場をつくり出した。

グラウンドは約3800平方㍍。津波襲来以前、クリが植えられていた同スポ少コーチの祖父の農地を転用した。市内の子どもたちに野球やサッカーに使ってもらおうと末崎体育協会が無償で借り受け、保護者らが石拾いや砂入れを担った。ネット、ベンチ、トイレなどを今後設置し、9月の完成を目指す。

末崎地区は末崎小、末崎中の校庭に加え、市営球場にも仮設住宅が並ぶ。同スポ少は震災後、室内練習場などで練習してきた。

こうした状況の下、地域の有志がグラウンド整備に立ち上がった。大船渡西ロータリークラブ（金比呂正会長、会員45人）、大船渡ロータリークラブ（金昌治会長、会員29人）が中心となり、フランス、ドイツ、イタリア、韓国の同クラブ、ロータリー財団が支援した。

大船渡西クラブ復興委員会の浜守豊秋委員長は「『大船渡のために何かしたい』と取り組んでいただいた」と支援に感謝する。

同スポ少は昨年、四つの県大会を制した強豪。佐藤啓太主将（6年）と浜守海斗副主将（6年）は「気持ちよく練習できる。頑張りたい」と笑顔。谷山監督は「子どもたちが思い切りできるグラウンドができた」と地域のつながりが生んだ運動場で活躍を誓う。

整備されたグラウンドで元気に練習する末崎野球スポーツ少年団の児童＝大船渡市

宮古ニシン漁に希望

震災後初めて稚魚確認

震災後初めて船上から行われた稚魚調査＝宮古市・宮古湾

宮古市の独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所宮古庁舎（旧宮古栽培漁業センター）は23日、宮古湾奥で震災後初めて船上から稚魚調査を行い、ニシンなどを採捕した。ニシンは津波のため今年の生育は難しいとみられていたが、稚魚の確認により2年後に産卵のため戻る成魚の水揚げに希望がつながった。

宮古庁舎の研究員らが約2時間網をたぐった。サヨリやカタクチイワシ、チカ、ボラなどが掛かり、津波が押し寄せた後の湾奥でも魚が育っていることが分かった。

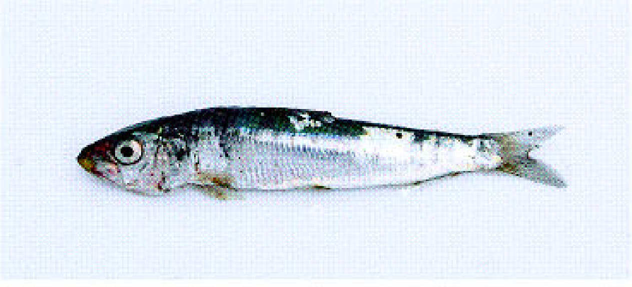
宮古庁舎の野田勉研究員は「魚に良い環境が湾に残っているということ。水産業の再開に弾みがつく」と手応えを感じていた。

ニシンは体長7、8㌢の2匹が捕れた。ふ化後4カ月程度の大きさという。ニシンの産卵期は2～4月。津波を生き延びたか、後で成魚が湾内に回帰し産卵した可能性がある。

宮古湾の産卵期のニシンの漁獲は1985年に1㌔と少なかった。しかし、宮古庁舎や漁業者が力を合わせ稚魚放流などで資源増加に努め、近年は1㌧を超えることも珍しくなくなっていた。

今年の人工授精卵放流は2月後半、例年の10分の1に当たる20万～30万粒を放流した段階で津波が押し寄せたため、2011年生まれのニシンは絶望視されていた。

調査に協力した同市赤前の山根幸伸県指導漁業士は「2年後のニシン空白を覚悟していたが、ゼロではなくなった。うれしいことだ」と表情を崩した。


確認されたニシンの稚魚

いわて　東日本大震災

津波てんでんこ

題字・山下文男さん

修復中の自宅でほほ笑む久保田均さん（右）と真知子さん

宮古市津軽石
久保田　均さん(63)

震災と病乗り越える

自宅で地震に遭った。揺れ具合から大津波が来ると確信し、妻＝真知子さん(62)＝を呼んだら答えがない。散歩の時間だと思い出した。気に掛かったが「1人ずつ避難だよ」と打ち合わせてもいたので外に出た。

消防団員として避難誘導に当たった後、津軽石小の避難所に向かった。「もう妻に会えないのか」との思いもよぎったが、幸い午後7時前に再会できた。

約1カ月避難所にいた後、自宅2階で暮らし始めた。4月半ばごろ、体調を崩し診てもらったところ、以前治療したこともある心臓の不調と分かり盛岡へ救急搬送され命拾い。今は1階半ばまで水に漬かった自宅を直している。

津軽石の郷土史読本「伏流水」を書き継いできた。「今秋にも3冊目」と考えていたところ、津波が来た。内容を編集し直すが、妻が付けている震災日誌も活用しようかと思う。千年に一度とも言われる大津波を後世に伝えたい。

～被災地からのメッセージ～

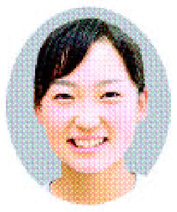
インターハイ全力で

遠野市下組町
菊池　学君（遠野高3年）

サッカー部の主将を務めている。部内には沿岸部出身のメンバーが多く、今回の震災は大きなショックを受けた。北東北インターハイでは岩手の代表として、多くの人々の思いと共に戦う。自分たちの強みは選手全員が助け合い、最後まで決して諦めない粘り強さ。まずは初戦に全力を注ぎ、県民を勇気づける成績を持ち帰りたい。

～被災地へのメッセージ～

「笑顔の花」広がって



花巻市石鳥谷町中寺林
佐々木愛美さん（石鳥谷中2年）

8月の石鳥谷夢まつりで行う募金活動の際プレゼントする「チャリティーうちわ」作りに取り組んだ。復興支援に協力することができてよかった。一人でも笑顔を取り戻してもらえればうれしい。まつりでは、5千発の花火が打ち上げられる。みんなの笑顔の花も広がり、復興へ心一つになるきっかけとなることを願っている。

盛岡さんさ見よう

実行委　被災民400人招待

盛岡さんさ踊り実行委（会長・谷藤裕明盛岡市長）は8月1日から4日まで盛岡市中央通をメーンに開催される第34回盛岡さんさ踊りに宮古、大槌、大船渡、釜石、陸前高田の各市町の住民計400人を無料招待する。

今年は「東日本大震災からの郷土の復興を願う人たちの思いの結集と絆の証」と位置付け、4日間で延べ244団体、3万4千人が参加する。

各日とも日帰りで100人ずつ招待（指定場所に午前9時45分までに集合。出発地着・解散は午後9時45分）。先着順で定員になり次第締め切る。バス料金と昼食・夕食代、旅行保険は実行委が負担する。

申し込みはトップツアー盛岡支店（019・651・8800、平日午前9時20分～午後6時）、問い合わせは実行委事務局の盛岡商工会議所（019・624・5880）へ。対象地域と募集人数、集合場所は次の通り。

▽1日　宮古市100人・宮古市民総合体育館前（田老地区はグリーンピア三陸みやこ前）
▽2日　大槌町50人・町役場仮庁舎前、大船渡市50人・市民文化会館「リアスホール」前
▽3日　釜石市100人・JR釜石駅前
▽4日　陸前高田市100人・陸前高田市役所前。

浜っ子球児が躍動

盛岡・学童大会に釜石連合チーム

「いくぞー」。野球ができる喜びを胸に試合に臨む釜石ドリームイースタンの選手＝盛岡市

盛岡市で23日開幕した岩手日報杯三陸学童軟式野球大会兼マクドナルドカップ大会（県野球協会、岩手日報社主催）に、震災で大きな被害を受けた釜石市の連合チーム「釜石ドリームイースタン」が出場した。全国から寄せられた野球道具を使い、「浜っ子」が感謝の思いを胸に全力プレーを見せた。

釜石ドリームイースタンは震災で地区予選が開催できなかったため、釜石市東部の平田、唐丹、白山、浜っ子の4スポーツ少年団の6年生で結成した。選手の半数近くが家や野球道具を失うなど、震災で大きな被害を受けたため、全国から寄せられたグラブやバットを使って大会に出場した。

ユニホームは新日鉄釜石OBの支援を受けて新調。スタンドには「全力プレー浜っ子」の横断幕と大漁旗が躍った。多くの善意に感謝し、野球ができる喜びを胸に臨んだ前沢北スポ少との初戦。2度同点に追い付く粘りを見せたが、結果は6―10。敗れても選手の顔は晴れやかだった。

4打数3安打と活躍した平田小の大尻悠矢君は「自分の力を出し切ったので悔いはない」と胸を張り、釜石小の佐久間栄己君は「みんなと仲良くなって楽しかった。またこのチームで野球をやりたい」と笑顔で話した。

ランニングホームランを打った白山小の佐々木皓紀君は「いい試合ができて満足」、木村雄大主将（唐丹小）は「とにかく試合が楽しかった」と全力プレーで野球を楽しんだ。

24日は釜石市西部にある甲子、小川、小佐野、白浜の4スポ少でつくる釜石ドリームウエスタンが出場する。

漂流の結婚記念ボール帰還

陸前高田　茨城の夫妻届ける

石川洋一さん（右）、君代さんから結婚記念のサッカーボールを受け取り、喜ぶ菅野洋さん（左）、行江さん＝陸前高田市

茨城県高萩市の石川洋一さん(75)、君代さん(68)夫妻は23日、津波で同市に漂着した結婚記念のサッカーボールを陸前高田市の市職員菅野洋さん(40)、行江さん(39)夫妻に届けた。16年前の思い出が詰まった宝物が戻り、菅野さん夫妻は「本当にありがたい」、石川洋一さんも「肩の荷が下りた」と感激に浸った。

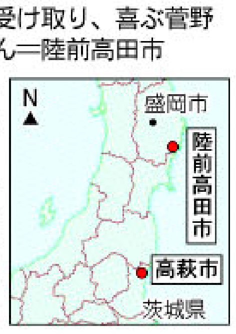
サッカーボールは1995年1月12日、菅野さん夫妻の結婚を記念し、同僚から寄せ書き入りで贈られた。菅野さんは津波で自宅が被害を受け、家にあったボールも流失した。

石川洋一さんら日立工高OB会高萩支部の14人が3日、陸前高田市から直線距離で約265㌔離れた高萩市の赤浜海岸での清掃活動中にボールを発見。泥を取ると、寄せ書きがあり「誰かの大事な宝物かもしれない」と持ち主を捜した。

結婚を祝う寄せ書きの名前をインターネットで検索すると、岩手日報の記事に同じ名前があり、そこから本人にたどり着いた。

石川さん夫妻は自ら届けたいと23日早朝に高萩市を出発した。洋一さんは「ボールをお渡しできて本当にうれしい。これから頑張ってほしい」と喜んだ。

菅野洋さんは「メッセージを書いてくれた人も津波で犠牲になっている。何もなくなってしまったが、宝物が戻ってきた。大変ありがたい」と感謝した。



この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。